
侍LOVE

氷川類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍LOVE

【Nコード】

N5702S

【作者名】

氷川類

【あらすじ】

ある日家に帰ると、玄関先に大きな段ボールが置かれていた。

【この度は当店の目玉商品である『侍人形』をお買い上げ下さり誠にありがとうございます。このTF 03は主に江戸時代の侍をモチーフとして造られております。注目のポイントは鋭い眼光と自由に曲げる事の出来る手足です。付属の刀を持たせ玄関先に飾れば番犬になる事間違いないし！尚、注意点などは別紙参照となっております……】

いや、買ってないんだけど……。

この日からアンドロイドの侍と青年の奇妙な同居は始まった。

B Lですが性的表現はありません。

「何だこれ？」

ある日仕事から帰ると部屋の前に大きなダンボールが置いてあった。

こんな胡散臭い物、支障がないならシカトをするのだが、扉を塞ぐ形で置いてあるものだからシカトをする訳にもいかず、苛立ちながら俺は箱に目をやった

【上条 司様】

どうやらこのバカデカイダンボールは、俺宛ての郵便物らしい。送り主の欄には『Y U U K I コーポレーション』とあるが全く見覚えはない。

「なっ、重っ……チッ」

とりあえず邪魔だしこのままじゃ部屋に入る事が出来ないから部屋の中に入れようと持ち上げたら、それは腰が抜けそうな程重く俺の苛立ちは最高潮。

「ツイてねーな……」

思えば今日は朝からツイてなかった。

満員電車で痴漢に間違われ遅刻するは、上司にミスをなすりつけられ部長に呼び出されるは

、コンビニで弁当買えば箸が入ってないは……まあ最後のはちっちゃい事だがとにかく散々だった訳で。

それに加えて得体の知れないものの処理……

「糞ッ」

俺は半ば引きずりながら箱をリビングへと押し込むと苛立ちをぶつける様に横っ面を蹴り上げた。

風呂上がり、俺はビールを片手にダンボール箱と睨めっこしていた。

上京して七年になるが、こんな大きな郵便物を受け取った事はなかったし、ましてや送り主の事も分らない。

「気持ち悪いよなー」

慎重にガムテープを剥がしながらそう呟き、恐る恐る箱を覗き込んだ俺が目にしたもの、それは……

「うわっ、これ人間？……違うか」

箱の中には一体の人形が入っていた。

一応、口元に手をかざし呼吸を確かめてみる。
息はない。

でもそうしなければ安心出来ない程人形は精巧に造られていた

年の頃は大体三十代後半から四十代前半といった所だろうか？

性別は男性。

全裸の人形の股にはご丁寧に立派ないちもつがある。

丁度鎖骨の上辺りに【YUKI】と焼き印らしきものがあり、触った感じ人間の肌と変わらない適度な弾力があった。

とりあえず、有り得ない状況ではあるが見つめていたってどうなるものでもないし、付属されていた取り扱い説明書らしき物を開いた。

「えーと何々、この度は……」

【この度は当店の目玉商品である『侍人形』をお買い上げ下さり誠にありがとうございます。このTF 03は主に江戸時代の侍をモチーフとして造られております。注目のポイントは鋭い眼光と自由に曲げる事の出来る手足です。付属の刀を持たせ玄関先に飾れば番犬になる事間違いないし！尚、注意点などは別紙参照となっております……】

「何だこりゃ、つーか買ってねーし……」

読めば読むほど訳が分からなくなる。何だか面倒くさくなり説明書を放り投げた俺は振り向くと同時に固まった。

「貴様何者だ？」

「な、な、な、何だお前っ！」

全く、理解出来ない。

さっきまで箱の中で微動だにしなかった筈の人形が、目の前で刀を振りかざし立っているなんて事、理解する方が難しい。

「拙者の名は紅。侍型アンドロイドである」

「に、人形じゃないのかっ？」

「……人形だと？」

「ヒッ」

物凄い形相で近付いてくる紅に生命の危機を感じた俺は両手で頭を抱えながら床に伏せた。

有り得ない、有り得ない有り得ない

！！！！

俺、まだ死にたくねー！

今すぐ大声で叫び逃げ出したい。しかし立ち上がった瞬間ズバツと斬られてはたまったもんじやないと瞬時に判断し、逃げ出す事を諦めた。

だが、予想に反し聞こえてきたのは小さな溜息で。

「全く……また間違えよつたな……」

間違い？

「すまぬ」

紅の話によると、本来送られてくる筈だった侍人形とアンドロイドの紅は容姿がそっくりな為、こういった間違いがよく起こるらしい。

いや、どっちにしろ俺は買ってないんだけど……

「あの、それで俺はどうすればいいんですかね？」

「うむ、こちらの手違いで大変迷惑をかけた。とりあえず拙者を壊して頂きたい」

「はい？」

これまた紅の話によると、アンドロイドは初期起動の際一番初めに見た人間に忠誠を誓うようプログラミングされている為、不要になれば捨てられる、いわば使い捨てのアンドロイドらしい。

「簡単な事だ。背中にある小さな窪みに口付けを落とせばは砕け散る仕様になっておる。」

「いや、普通に返品すればいいんじゃない……」

「返品したとて同じ処理をされるのだ。ならば最後まで主人の手で朽ちたいもの」

「……………」

「その様な悲しげな顔をなさるな、司殿は優しいのだな」

「……そんな事ない」

「心配要らぬ、拙者はアンドロイド。痛みは感じぬ。さあ司殿、早よう……………司殿？」

どうしてそんな判断をしたのか自分でもよく分からない。

一人暮らしが長すぎて、寂しかったのかもしれないし、ただの興味本位だったのかもしれないが、気が付くと俺は紅の手を握り締め言っていた。

「俺、紅さんでいいや。侍人形は要らない」

まあそもそも侍人形も頼んでないのだけど……とにかくこうして俺と紅のおかしな同棲(?)生活は始まった。

「きえええええい！」

空がまだ夜の色を残す午前四時、聞こえてきた奇声に俺は顔を歪めた。

自然と落ちる瞼を無理やり開きベッドを下りキッチンへ向かうと、予想通り何かと戦っている紅の姿があった。

「おはよう紅さん」

「おお、おはよう。相変わらず司殿は朝が早いな」

誰のせいだ誰の……

「今日は一体どうしたんですか？」

「うむ、卵焼きというものを作ろうとしておるのだが、こやつめが拙者に逆らいよるのだ」

紅の手にはぐちゃりと割れた卵の残骸らしきものが握られていた。
一緒に生活するようになって二カ月弱

気付いた事がある。

紅はとても不器用な侍だった。

「もしかして紅さん、刀で卵を斬ったんですか？」

「…………間違っておるか？」

…………もう全てが間違いだよ

「教えてあげますから、とりあえずその物騒な物をしまつて下さい」

「…………かたじけない」

毎日こんな感じだから、必然的に俺は寝不足だ。

「外に出る時は？」

「ガスの元栓閉めて戸締まり確認」

「刀は？」

「持ち出さない」

「訪問販売は？」

「買わない！」

「よろしい。じゃあ行ってきます」

「うむ、気を付けてな」

いつの間にか、このやり取りをしてから仕事へ向かうのが日課となった。

何故かって？

鍋を火にかけたまま出掛けて小火騒ぎ。

鍵をかけずに出掛けて泥棒が入った。

刀を持ち出し危うく逮捕されるところだった。

極めつけが、高級羽毛布団を二組買わされて破産寸前

勿論クーリングオフしたけど。

こんな事ばっかありや誰だって警戒するだろ。

けど不思議と怒る気になれないんだよなー

シュンとした紅の顔が可愛くて……

……………可愛い？

男だし、おっさんだし、ありえねーだろ。

でも、いや、うーん……………あんま認めたくはないんだけど、時たまめっちゃ可愛いんだよあの人。

羽毛布団買った時だって……

「ちょっと紅さんっ！何これっ！こんな布団が百八十万とか詐欺だよ詐欺！」

「詐欺とはなんでござるか？」

「だーから、騙されたのっ！だいたい何でこんなもの買ったんですか？」

「これは……疲れがとれる布団だと聞いた。司殿は最近疲れておつたろう？だから少しでも疲れがとれればと、拙者は……」

思いつきり凹んだ顔で俯く紅の姿は、おやじ顔に似合わず弱々しくて、思わず抱き締めたくなってしまった。

……やばいな俺

女日照りでおかしくなったのだろうか？
でも本当に可愛かった……

「おーい上条、かーみーじょーうー」

「うおっ、何だ榊か」

「朝からなに妄想してんだいやらしい」

ニヤニヤと笑いながら肩に腕を回してきたのは同じ会社に勤める同期の榊伸太郎。

中高と同じ学校だったこいつはいわば悪友ってやつだ。

「別に妄想なんかしてねーよ！それより何か用か？」

正直そんな事はどうでもいいから離れろと言ってやりたい。聞こえてくる女子社員達の囁きに自然と溜め息が出た。

「やだっ、榊さんと上条さんまたひつついてるわよ！やつぱり付き合ってるのかしら？」

「やーんどキドキしちゃう」

聞こえてるって……

こんな風に騒がれるのは榊のせいだ。

三力月前、会社の飲み会の席で酔った榊は何を思ったか事もあるうにみんなの前で俺の唇を奪った。

それ以来、榊と居ると女子社員の格好の餌食となってしまうわけで

……

「あー、今日お前ん家行っていい？紅さんに会いたくてさ」

「別にいいけど……てか離れろっつーの！」

「司はウブだねえ。じゃあ帰りロビーで待っとくわ」

投げキッスをして颯爽と立ち去る榊。俺は女子社員の熱い視線に晒されげんなりしながらパソコンを立ち上げ仕事を始めた

仕事が手につかない……

” 紅さんに会いたくて ” ってどういう意味なんだ？

最近榊はよく家に来るようになった。

まあ元々俺と榊は独り者同士よく連んでいたが、紅が我が家に来るまでは週一くらいだったのに、紅が来てからは週に三回は家に来るようになったから、もう家に住んでるようなもんだ。

「あいつ……好きなのかな？」

「何がですか？」

向かいのデスクから身を乗り出した女子社員と目が合い焦る俺。

「いや、こっちの話」

「上条さん最近ボーっとしてる事多いですね！恋煩いですか？」

俺は反省した。

仕事中なのに頭の中は紅の事だらけてのは流石にまずい。

気が付けばいつの間にか紅の事を考えてるなんて……まるで恋する乙女じゃないかっ！！

少し凹んだ俺は、にっこり微笑んでやんわり否定しながら今度こそ仕事をしなければと再びパソコンに目をやった。

「上条　こっちこっち」

エレベーターの扉が開くと同時にロビーで手を振る榊の姿が目に入った。

叫ぶなってば……

周りの女子社員達が熱い視線を向けている事に榊は全く気付かない、というよりは興味がないのだ。

少しつり上がった力強い印象の瞳が魅力的な榊は社内ではNo.1のイケメンだと言われている。んで、No.1の美女だと言われる秘書課の前田紗耶香さんも榊の事が好きだと噂だ。

だが榊は誰の告白も受け入れない。

理由は簡単だ。

彼はゲイだから、女性の誘いは受けないって訳。

「勿体ない……」

「何が？」

「何でもねーよ。行こうぜ」

朝以上の異常な黄色い声に晒されながら、俺は会社を後にした。

「ただいま紅さーん、今日の晩飯何？」

玄関が開くやいなや迎えてた紅の体をぎゅっと抱き締め首筋に口付ける櫛。

「これは櫛殿、お疲れ様でござったな。今日はすき焼きというものの材料を揃えておいた。あつ司殿もお疲れであろう？ささ、早よう中へ」

あつて何だよ紅さん、俺はついであつつーの！てか何触らせてんの？

………って何言ってんだ俺は。

「上条く、じとつとした目で見んなよ。ヤキモチか？」

「なぬつ、どうしたのだ司殿、そのように顔を歪めて………」

「櫛煩い！別に何でもないからっ！」

きょとんとする紅の表情に苛立つ司。

紅の腰に絡みつく榊の逞しい腕が憎らしい。それでも司は胸に渦巻くム力つきを認めたくなくて、乱暴に靴を脱ぐとキッチンへと向かった。

はつきり言つて俺は、榊が何を考えているのか理解が出来ない。もう随分と長い付き合いになるが、こいつの心の内を読めた事なんか一度もないし、榊も見せようとはしないから。

「紅さんはい、あゝん」

「榊殿、拙者は赤子でないぞ」

「いいからほら早くっ！」

いつもこうだ。

俺に友達が出来ると榊はいつもちよっかいをだす。容姿的な共通点は見当たらないから好みって訳じゃないと思うんだけど。

「榊いい加減にしろ！紅さん、嫌なら相手しないでいいよ」

「ん、拙者は別に嫌ではじやらんよ」

「……ふーん、ならいいけど」

……ム力つく。

邪魔者は俺ってか？

「司殿？」

「俺風呂入ってくるわ」

「じゅっくり〜」

俺はこいつに嫌われる様な事をしたのだろうか？

気付かない内に迷惑かけてた？

……嫌われる程？

てか嫌いならこんな頻繁に家に来るか？

分かんねえ。

「もしかしたらあの時の事が原因なんかなー」

高校一年の時、俺は榊がゲイなのだと知った。

当時も今と変わらずモテモテで、何故彼女を作らないのかと女の子達から詰め寄られたあいつは、あるうことが俺を好きだから彼女は要らないのだと言った。

告白されるのも初めてだったし榊は親友だったしで、本当めっちゃ真剣に悩んだ。

意識しすぎて会話は不自然になるし、目も合わせられなくなったけど、きちんと考えないとして悩みまくった俺。ただ榊は

「お前を好きって言ったの冗談だから。まあゲイってのは本当だけど……キモい？」

とかサラッと言いやがった！俺マジで真剣に悩んだのにあいつはっ！

キモいとか見損なうなっつーの！
今思い出しても腹が立つ！

……あれ？これなら榊が俺を嫌うんじゃないかって俺が榊を嫌うんじゃない？

「意味不……」

俺は結構嬉しかったのに。

平凡な俺を好きだなんてありえねーとか思いながら、それでも嬉しかったのにさ。

「あーやめやめ、うじうじすんなっつーの！」

考えたって分からないのなら考えるだけ無駄な事だ。

直接聞くのが手っ取り早い！

湯船から立ち上がり頭から水をかぶってから俺はタオルを手にとった。

着替える時間が勿体無い。

腰にバスタオルを巻いて俺は扉を開いた。

「っ！！！」

人間という生き物は本当に驚くと声も出ないのだと身を持って知ってしまった。

目の前の光景が信じられず、思わず手で口を覆う。

重なり合う二つの体。

離れ際、唾液の糸が唇に橋をかける。

「……榊、何してんの？」

自然と声が震えた。

榊はそんな俺の姿を嘲笑う様に紅の髪の毛を強引に掴むと再び唇を重ねた。

「やめろっ！」

避けるばかり思っていたのに榊は微動だにせず、黙って俺の拳を受けた。

「何なんだよお前っ！何のつもりだっ！」

「司殿、落ち着かれよ」

「紅さんは黙ってて！」

口を拭いながら俺を見上げる榊の瞳は虚ろで何を見ているのか分

からないものだった。

「紅さんの唇って柔らかいのな、意外……」

お前は何を考えてる？

どうしてこんな事するんだ？

「お前紅さんの事好きなの？ならそう言えいいだろっ！」

「冗談、アンドロイドなんか好きになってどうする訳？気持ち悪い」

「なら何でこんな……」

「困ってる顔が面白かったから。大体好きって何？機械とやんの？
っ！かそもそも穴あんの？まああったとしても突っ込む気になんか
ならないだ……」

「司殿っ！……！」

再び振り上げた手の平は紅に掴まれ空中で止まった。

「これ以上紅さんを侮辱したら……俺はお前を一生許さないから」

「……司殿」

庇うように紅の前に立つ司を見上げ、榊はすぐさま視線を床へ落とした。

「俺は……」

「榊？」

「帰るわ……じゃあな」

別れ際、いつもなら必ず「またな」と別れる榊。

それは小さな事だけど大きな違和感を司の胸に刻み込んだ。

口元に浮かぶ笑みは幸せなものとは程遠く、扉の向こうに消えていった榊の背中はいささかだけ震えていた。

「追わなくてよいのか？」

「いいんだ。それより……傷付けてごめんなさい」

「何故謝る？拙者は傷付いてなどおらぬよ」

微笑む紅の頬に光る雫。
それを指でなで上げると、何故だかとても切なくなった。
人とは違う異形のもの。

黒い涙が司の指先を染める。

「紅さんは気持ち悪くなんかないから」

「司殿、拙者は傷付いてなど……」

顔を背けた紅の体を抱き締めると、カタカタと機械音が胸に響いた。

不規則に刻まれるその音は、とても悲しげな音で。

「紅さんは紅さんだから。俺が好きなのはアンドロイドなんかじゃ

ない……」

その肌は人と変わらず柔らかいの少しの温もりもなく、その冷たさが己がアンドロイドである証拠なのだと紅は嘆く。

「紅さん、俺の手握ってみて」

首を傾げる紅の前に手の平を差し出す司。その微笑みに誘われ紅は司の手に自身の手を重ねた。

「俺体温高いからさ、紅さんと相性いいと思う。俺の熱いくらでも奪ってくれていいから、ずっと一緒に居てよ」

「……しかし」

「もう俺紅さんの居ない生活なんか考えらんないから……お願いだよ」

上手い台詞も言えなくて、不安を取り除いてあげる事も出来なくて、不甲斐ない。

だけど紅さんを想う気持ちなら誰にも負けないうって自信をもてるから。

「司殿……無礼を許せ」

ガラス玉みたいに澄んだ瞳がゆっくりと俺の視界を埋め尽くす。そらす事も、閉じる事もせず、俺はただその恐ろしい程に美しい瞳を見つめ続けた。
重なる唇は至極の味。

俺達は飽きる事なく幾度も口付けを重ね続けた。

「司殿が望むならば、拙者は全力で貴方を抱き締め離さないと誓おう」

何故紅が司の元に届けられたのかは未だに分からない。
だがそんな事どうでもいいと思える程、司は紅を愛していた。

「ありがとう紅さん」

これから思いもよらない困難が二人を待ち受けているかも知れない。
それでも二人なら負ける気がしないよねと笑い、司は再び紅の唇を

寄せた。

お終
い

（後書き）

まったくの思いつきで書き上げた作品ですw
侍大好きなんだけど、上手く表現できなくてへこむわorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702s/>

侍LOVE

2011年5月14日11時10分発行